



いれずみ物語

— 27 —

小野 友道

スティグマとしてのいれずみ —— アウシュヴィッツの囚人番号 ——

スティグマ stigma の語源はギリシャ語 stizein に由来し、いれずみを入れることの意である。したがって、それは肉体上のしるしを意味していた。このスティグマをつけることにより、奴隷・犯罪人・謀反人などに汚れた者、卑しむ者という烙印をはって世間に知らしめ、共同体のスケープゴートの対象となした。江戸の刑罰としてのいれずみもまたそうであった。

スティグマの極端の一つは人種・民族に対する集団的スティグマで、人間性の否定が起こる可能性が強い。それがまさに「アウシュヴィッツ」であった。400万人が抹殺された場である。

*

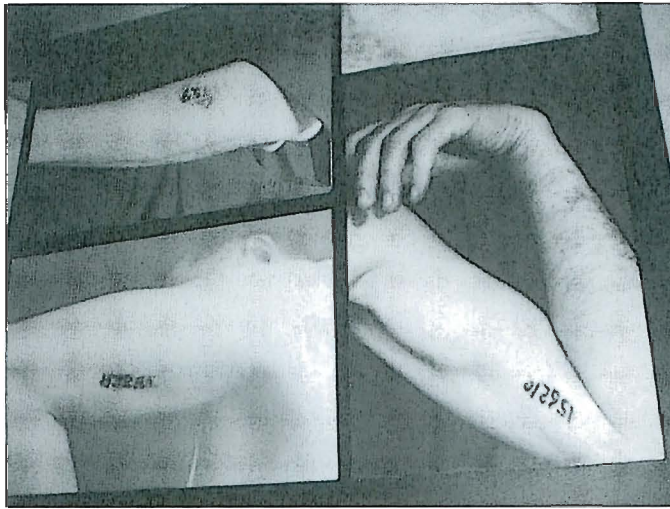
13歳の娘が、母親の友人でアウシュヴィッツに収容されていたベルトの、その「左腕にちょっと色あせた青インクの数字の入れ墨の痕が残っているのを見て」、ショックを受けた。それをきっかけに、親戚がやはりその収容所で殺された歴史学者の母が、娘の質問に向き合った本が『娘と話すアウシュヴィッツってなに?』である。

「どうしてベルトの腕には数字の入れ墨があるの?」

「ベルトはね、よく使われることばで言えば、強制移送されたの。…第二次世界大戦の時期に強制移送されたと言え、それは強制収容所

に連れていかれたという意味なのよ」「連れてこられた女の人たちは服を脱ぐように命令されたの。あの時代には、みんないまより慎み深かったから、人前で裸になてならなかったの。だからそれは、多くの人にとって最初の屈辱だった。そのあと彼女たちは検査された。いちばん人に見られたくない場所にある穴のなかまでね。そしてシャワーを浴びさせられて、毛を剃られた。頭も、腋の下も、陰毛も。そして着るものをわたされた。(中略)そのあと——ベルトの腕を見てください——金属の万年筆のようなものを使って、青いインクで二度と消えない数字を身体に彫ったのよ」「たくさんの人から話を聞いたけれど、それほど痛くはなかったらしいわ。でもそれは、その人たちに残された唯一のもの、つまり名前をうばい取るという意味を持っていたの。それ以来、身体に彫られた数字でしか呼ばれないようになったのよ。(中略)もう何もなくなったのね。それ以前の生活で持っていたものは。服も、写真の一枚も、何ひとつもう持っていなかった」

囚人の登録作業は係員(収容者)の質問に従って行われ、「囚人名簿」に記載された後、左上腕に「囚人番号」をいれずみされた。その数40万人に及んだ。この数字のいれずみの意味



中谷 剛著『アウシュ
ヴィッツ博物館案内』
(凱風社)より転載

するところは「別世界に入ったのね。生き残ったおおぜいの人たちが証言のなかでそういったことを表現している。でもプリーモ・レーヴィ（イタリア生まれのユダヤ人作家、著者注）がいちばんじょうずに言っていると思うわ。<家、衣服、習慣など、文字通り持っているものをすべて、愛する人とともにうばわれた男のことを想像してもらいたい。この男は人間の尊厳や分別を忘れて、苦しみ以外にはただ肉体の必要を満たすだけの、空っぽな人間になってしまうだろう。というのは、すべてを失ったものは、自分自身をも簡単に失ってしまうからだ。こうなると、その人間の生死は、同じ人間だという意識をもたずに、軽い気持ちで決められるようになる。せいぜい、役に立つかどうかで判断されるぐらいだ>」

まさに人権そのものと引き換えられた「囚人番号いれずみ」は、ステイグマ以外のなにものでもなかった。

*

36歳から長崎大浦天主堂に6年、その間結核にも侵されたコルベ神父は、1936年ポーランドに帰国した。1939年にはナチス・ドイツ軍がポーランドに侵攻した。コルベ神父の運命も例外ではなかった。神父のあの番号は16670番だった。1941年7月、コルベ神父の属する第14号舎ブロックから、一人の男が脱走した。

「囚人たちの間に、ふいに冷水をあびせられ

たような戦慄が走りました。もし自分たちのブロックから、一人でも逃亡者が出た場合のナチスの報復は、決して生易しいものではない。そのために、10人あるいは15人が見せしめに選ばれて、殺されるのです」

予想たがわず10人が選ばれた。「ふいに、ほとぼしるような号泣が、犠牲者の一人から洩れました。<ああ……。女房や、子どもたち、おれは、おれは死にたくない。ユリウスよ、ボグダンよ……。それはフランシスコ・ガイオニチェック氏でした。(中略)囚人番号5659番でした。祖国のために、不法な侵略軍とたたかった誇り高い兵士も、最後の瞬間に、最愛の妻と二人の子どもの名前をさげび、男泣きに泣いたのです」その時、身代わりを申し出たのがコルベ神父であった。コルベ神父、いや囚人番号16670番は飢餓室で犠牲になったのでした。

*

アウシュヴィッツの約20年前、奇妙な小説が登場していた。カフカ、Franz Kafkaの『流刑地』である。アウシュヴィッツのような場所が出現するなど想像もしなかったであろうそのポーランドに、カフカは1883年に生まれた。1924年までの41歳の短い生涯であった。カフカの死と相前後してヒトラー、Adolf Hitler（1889～1945）のナチ党が台頭してきた。ナチスの勢力拡大にともないユダヤ人弾圧が厳しくなり、ユダヤ系作家の書物が書店・図書館から姿を消し

た。もちろんカフカの本もその運命に遭ったが、もともと彼の作品は、ノートに書かれたままのものや、出版されても部数がきわめて少なく、戦後、ニューヨークで全集が発表されてはじめてにわかに注目された。ヒトラーあるいはナチスの幹部たちは、はたしてこの『流刑地』を読んだであろうか。ドイツ語の小説であるが、おそらく彼らの目に触れることはなかったと思いたい。

「実にたいした機械でしてね」で始まるこの小説は、死刑執行に際し12時間かけていれずみを行い、最後に深々と刺し殺す残忍な機械である。「ごらんのとおりに三つの部分からできております。それぞれがいつの間にやら、あだ名でよばれるようになりましてね。ちなみに申しますと、下のところは《ベッド》であります。上の部分は《製図屋》とよばれております。それから真中のブラブラしたのが《馬鋏》であります」「われわれの判決は、とりたて酷しいものではありません。当人が犯した罪を《まぐわ》でからだに書きこむのです。例えば、この男の場合―」将校は囚人を指さした。「―《上官を敬うべし!》とです。からだに書きこむわけですよ」「《ベッド》といっしょに揺れている囚人のからだを、針の先端が刺すのです」「二種類の針がちらばっておりますでしょう。長い針が文字を刻みこんで、短い針が水をふきかける。血を洗いながら刻み目をはっきりさせるためです。墨ではなくて腐食剤が入られるが、これもまさにいれずみである。ステイグマである。

ところでカフカはユダヤ人作家なのか。カフカの両親はユダヤ人の家系である。彼の死後ユダヤ人の間で彼がどう見られていたか。ベンジャミンの『ユダヤ展望』誌の1934年12月21日号に「ドイツの環境の最近の変化のため、ユダヤの血をひくドイツ語使用作家はユダヤ人と見なされるようになった。…カフカ自身自己をユダヤ人と感じていた。病床で彼はヘブライ語を勉強した。カフカの作品における太古のユダヤの精神・思想・言語の遺産が跡をとどめていることは、たとえ個々についての分析的研究がなく

とも、疑う余地がない」と、本来の意味でのユダヤ人作家と呼ぶにふさわしいと述べている。ナチスの政権獲得に伴うユダヤ人迫害が始まったころのカフカ論である。1935年に布告されたニュルンベルク法、「ドイツ人の血とドイツ人の名誉保護のための」法律においてはっきり形をとったユダヤ人絶滅政策の直前である。カフカがユダヤ人作家か否かの議論はおくとしても、ナチスの下で生存していたら、カフカもまたアウシュヴィッツという流刑の地でいれずみをされていたであろう。

*

今、個人情報保護の名の下などで、われわれはコンピューターのパスワードや携帯電話をはじめ、幾つもの個人番号を持っている。病院でも番号のみで呼ばれる。病気も番号で分類されている。そのうち個々の家の表札も消えて番号だけになるのではないか。お隣同士、番号のみの付き合いになる。最初から番号になってしまえば差別されることはないのだろうか。いやいや、番号の世界には、温かな肌のぬくもりを感じる人情味が生まれる余地はない。気に入らなければその番号を抹消するだけである、あのアウシュヴィッツも個人の人権を消して番号に換えたからこそ大量虐殺をし得たに違いない。番号の世界になると、きっと「番号消し」あるいは「番号入れ」というステイグマが新たに生まれるのではないか。何やらそんな恐ろしく不安な時代に生きている気がしてならない。いくばくかの個人情報をお互い知って、その上で袖擦り合わせて初めて人に優しい世間が実現すると言え、それは逆行なのだろうか。

(熊本保健科学大学・学長)

文献

- アネット・ヴィヴィオルカ(山本規雄訳):『娘と話す アウシュヴィッツってなに?』, 現代企画室, 2004.
池田浩士 他:『カフカの解説』, 駁々堂出版, 1987.
石黒 毅:『ステイグマの社会学―烙印を押されたアイデンティティ』, せりか書房, 1970.
大谷藤郎:『現代のステイグマ』, 勁草書房, 1993.
早乙女勝元:『アウシュヴィッツのkolbe神父 優しさと強さ』, 小学館, 1983.
中谷 剛:『アウシュヴィッツ博物館案内』, 凱風社, 2005.